

## 研究報告

### 患者による受け持ち学生のコミュニケーション技術および 観察技術に対する評価と期待 —成人看護学実習における慢性期患者を対象として—

佐藤美恵<sup>1)</sup>, 池田敏子<sup>1)</sup>, 渡邊久美<sup>1)</sup>,  
縦野香苗<sup>1)</sup>, 金尾直美<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>岡山大学医学部保健学科, <sup>2)</sup>国立がんセンター東病院

**要旨** 学生が実習で受け持った入院患者が、学生の実習態度や看護技術をどう評価しているのか、学生にどのような態度や技術を期待しているのかを明らかにする目的で調査を行った。対象は、慢性期看護実習で学生が5週間継続して受け持った患者のうち、研究への同意が得られた19名の患者である。本稿では、看護技術のうち、コミュニケーション技術および観察技術について報告する。調査の結果、学生のコミュニケーション技術および観察技術に対する患者の評価はおおむね良好であり、それらの技術に対する患者の期待は高いことが明らかになった。しかし、少数ではあるものの否定的な評価や学生には全く期待しない患者もおり、看護者としての姿勢に対する教育、受け持ち患者決定における条件などについては、今後さらに検討の必要性があることが示唆された。

キーワード：看護学生、コミュニケーション技術、観察技術、評価

#### はじめに

看護は、さまざまな健康レベルにある多種多様な価値観を持った人々を対象としており、看護者が行った援助をどう受け止め、どう評価するかは、個々の患者によって異なる。言い換えれば、一人一人の患者に提供された看護の善し悪しは、看護者側からの判断のみでなく、それぞれの患者にとってどうであったかということ抜きにして考えることはできない。そのため、提供された看護に対する患者自身の主観的評価は、看護の評価を行う上で不可欠である。このことは看護学生が実習学習として実施する看護の場合も例外ではない。基礎看護教育に携わる筆者らは、臨床実習で看護学生が受け持った患者が、受け持ち学生の実習態度や看護技術をどのように捉えているのかを明らかにすること、すなわち患者による

看護の評価は、患者中心の看護を志向する看護教育を考える上で欠かすことのできない視点であると考えている。

患者自身が看護をどのように受け止め、看護者に何を期待しているかという視点からの研究として、菊池<sup>1)</sup>は退院患者を対象に入院中に受けた看護に対する満足感および看護師への期待を調査しており、山里他<sup>2)</sup>や岩沢他<sup>3)</sup>は入院中の患者を対象に看護ケアに対する満足度を調査している。また、三好<sup>4)</sup>は成人患者を対象に看護学生の受け持ち患者になることに対する認識および学生の行う看護技術を受けることに対する考え方を調査し、長谷川<sup>5)</sup>は小児看護学実習で学生が受け持った患児の付き添いを対象に学生の実習行為をどのように受け止めているかについての調査をしている。しかし、看護学生の実習態度や看護学生が実施した看護技術について患者がどのように感じ、どのようなレベルを期待しているかについての研究報告はない。

本調査は、基礎看護学の立場から、慢性期看護実習で学生が受け持った患者を対象として、学生の態度や看護技術に対する患者の主観的評価を明らかにしたものであ

2004年11月22日受理

別刷請求先：佐藤美恵 〒700-8558 岡山市鹿田町2-5-1  
岡山大学医学部保健学科

る。患者に調査した内容は、学生の実習態度や学生が実施した基礎看護技術についての評価およびそれらについて学生にどの程度期待するかである。その具体的項目は、基礎看護学で習得することを目標としている態度や技術である。

## 目 的

学生が臨床実習で受け持った入院患者が、受け持ち学生の実習態度や実施した看護技術をどう評価しているのか、また、看護学生にどのような態度や技術を期待しているのかを明らかにする。本稿では、受け持ち学生が実施した基礎看護技術に焦点を絞り、そのうち、コミュニケーション技術および観察技術について明らかにする。

## 本研究における基礎看護技術の分類

本研究では基礎看護技術を表1のように分類した。

## 方 法

### 1. 対象

3年制医療技術短期大学部における慢性期看護実習である成人看護学実習Aで学生が5週間継続して受け持った患者のうち、研究への同意が得られた男性8名、女性11名の計19名の入院患者である。このうち、本稿での分析対象は、コミュニケーション技術および観察技術に関する項目に有効回答であった男性6名、女性10名の計16名である。16名の平均年齢は62.9±9.9歳(男性67.0±8.9歳、女性60.4±10.0歳)である。診断名としては、

表1 本研究における基礎看護技術の分類

分 野	小 分 野	実際の質問項目
基本技術 (あらゆる看護行為に共通する基礎的な技術)	コミュニケーション技術 (患者との意志疎通を図り、信頼関係を築いていくために必要な技術)	自己紹介 挨拶 訴えを聞く 訴えを理解する 信頼できる ケアの説明を十分する ケアの方法について患者の意見を尊重する わかりやすい言葉づかい 丁寧な言葉づかい
	観察技術 (生命の徴候を客観的に捉えるために必要な技術)	体温測定 脈拍測定 血圧測定 症状の観察
生活援助技術	環境整備	シーツ交換, 病室の清潔 他
	清潔援助	洗髪, 清拭 他
	排泄援助	尿器, 便器 他
	食事援助	食事介助, 栄養指導
	休息・活動援助	睡眠・休息の工夫 他
移動援助	車椅子 他	計20項目
診療援助技術	薬物療法	内服の介助, 点滴の管理 他
	診療	診察時の介助, 測定 他
	褥法	氷枕, 湯たんぽ
	その他	経管栄養, 浣腸 他
総合した技術	看護過程	問題の解決, 苦痛の軽減 他
	指導 等	指導の時期, 指導の内容 他

膠原病5名、癌3名、血液疾患2名、悪性リンパ腫2名、糖尿病2名、その他2名である。主な治療は、薬物療法12名（そのうち6名は化学療法）、精密検査2名、血液透析1名、末梢血幹細胞移植1名である。日常生活は、医師の指示により制限されている者が9名、制限はされていないが介助の必要な者が4名、自立している者が3名である。

## 2. 実習形態

成人看護学実習 A では、80名の学生を20名ずつのグループとし、4クール実施した。実習期間は5週間で、学生は各クールとも3カ所の病棟に分かれて実習した。原則として、学生は一人の患者を5週間継続して受け持つ方法での実習であった。実習指導は、各病棟に看護師が1名、教員が1名で担当した。その指導の下に学生は受け持った患者に対してアセスメント、看護計画の立案を行い、コミュニケーション、観察、日常生活援助、診療援助などを実践した。

## 3. 調査期間

1997年7月から1998年12月である。なお、この間のカリキュラムは同一のものである。

## 4. 調査方法

学生の受け持ち期間終了後、実習指導教員である研究者が選択回答方式の質問紙を用いて、患者に平均約1時間程度の面接調査を行った。

## 5. 倫理的配慮

調査への協力依頼は、学生が受け持った患者のうち、病状等について研究者および病棟看護師とで検討した結果、1時間程度の面接が可能であると判断された患者のみに行った。依頼は、患者が調査への協力の可否を自発的に決定できるよう、患者の看護ケアに直接的には関わらない研究者が行った。依頼に際しては、研究者が、研究の目的および方法を口頭で説明し、その趣旨に同意する場合には調査に協力してほしい旨伝えた。同時に、調査への協力の有無は今後の治療や看護ケアに何ら影響を及ぼさないこと、調査途中であっても中止あるいは中断できること、調査により得られた結果は統計的に処理し、個人が特定されるような形での公表はしないことを伝えた。さらに、本調査の結果は学生の成績評価には影響しないことも伝えた。

患者からの評価の対象となった学生には、患者による評価の内容を、我々の教育的判断に基づいてフィードバックした。

## 6. 調査内容

調査内容は、①実習態度12項目、次いで、基礎看護技術として、②基本技術13項目（コミュニケーション技術9項目および観察技術4項目）、③生活援助技術20項目、④診療援助技術15項目、⑤総合した技術14項目の5分野74の質問項目である。これらの各項目について、受け持ち学生に対する評価および看護学生に期待する度合を質問した。

本研究において、受け持ち学生に対する評価とは、受け持ち期間全体を通しての学生の実習態度や実施した看護技術を患者がどう感じているかということであり、評価の基準はそれぞれの患者の主観によるものである。また、看護学生に期待する度合とは、実習態度や看護技術に関して、看護学生にどの程度のものを求めるかということであり、期待するレベルの基準はそれぞれの患者の主観によるものである。

受け持ち学生に対する評価は、すべての質問項目について、「大変よくできた」、「ややよい」、「ふつう」、「あまりできなかった」、「できなかった」の5段階で選択肢を設定した。看護学生に期待する度合も同様に、「最も期待する」、「かなり期待する」、「ふつう」、「あまり期待しない」、「全く期待しない」の5段階で選択肢を設定した。

本稿では、基礎看護技術のうち、調査内容②の基本技術について報告する。②の基本技術の調査項目は、コミュニケーション技術として、「自己紹介」、「挨拶」、「訴えを聞く」、「訴えを理解する」、「信頼できる」、「ケアの説明を十分する」、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」、「わかりやすい言葉づかい」、「丁寧な言葉づかい」の9項目、観察技術として、「体温測定」、「脈拍測定」、「血圧測定」、「症状の観察」の4項目である。

これらの項目は、基礎看護学の領域において学習した内容に準じて構成し、同時に、患者にとって評価が可能な内容とした。また、コミュニケーション技術については、患者が看護者に期待していると考えられる内容を考慮して作成した。なお、この項目の一部は、国立大学病院の患者を対象とした調査<sup>6)</sup>で、患者が看護職員に期待するとした内容とほぼ一致している。

本調査における上記13項目の信頼性係数は、受け持ち学生に対する評価については0.91、看護学生に期待する

度合については0.81であった。よって、調査項目の信頼性は得られている。

7. 分析方法

受け持ち学生に対する評価は、「大変よくできた」を5点、「ややよい」を4点、「ふつう」を3点、「あまりできなかった」を2点、「できなかった」を1点とした。看護学生に期待する度合についても同様に、「最も期待する」を5点、「かなり期待する」を4点、「ふつう」を3点、「あまり期待しない」を2点、「全く期待しない」を1点として点数化し、以下の分析を行った。

- 1) 受け持ち学生が実施した技術の評価について、各項目の平均値を算出し、項目別評価得点を比較した。
- 2) 看護学生の技術に対する期待について、各項目の平均値を算出し、項目別期待得点を比較した。
- 3) 各項目ごとに、上記1)と2)の項目別評価得点と項目別期待得点を比較した。
- 4) 患者個々について、全項目において「学生が実施した技術に対する評価の段階」と「学生の技術に対する期待の段階」の関係を求めた。その関連は、評価の段階が期待の段階より高い場合は、「A. 期待より高い評価」、評価の段階と期待の段階が同じ場合は、「B. 期待と同程度の評価」、評価の段階が期待の段階より低い場合は、「C. 期待より低い評価」とした。そして、各項目ごと

に、A.B.C.の人数を算出し、各項目について評価と期待の関係を分析した。

結 果

1. 患者による学生の技術評価

基本技術13項目の項目別評価得点を表2に示した。コミュニケーション技術9項目のうち、得点が最も高かったのは、「挨拶」および「訴えを聞く」で4.56、次いで、「訴えを理解する」が4.50、「自己紹介」および「丁寧な言葉づかい」が4.38、「信頼できる」が4.31、「わかりやすい言葉づかい」が4.25、「ケアの方法について患者

表2 基本技術の項目別評価得点および項目別期待得点 n=16

基本技術	項 目	項目別 評価得点	項目別 期待得点
コミュニケーション技術	自己紹介	4.38	3.75
	挨拶	4.56	4.31
	訴えを聞く	4.56	3.94
	訴えを理解する	4.50	3.94
	信頼できる	4.31	4.13
	ケアの説明	4.06	3.75
	意見の尊重	4.13	3.94
	わかりやすい言葉	4.25	4.00
	丁寧な言葉	4.38	3.63
観 察 技 術	体温測定	4.00 (n=15)	3.44
	脈拍測定	4.19	3.56
	血圧測定	3.93	3.56
	症状の観察	3.88 (n=14)	3.64 (n=14)

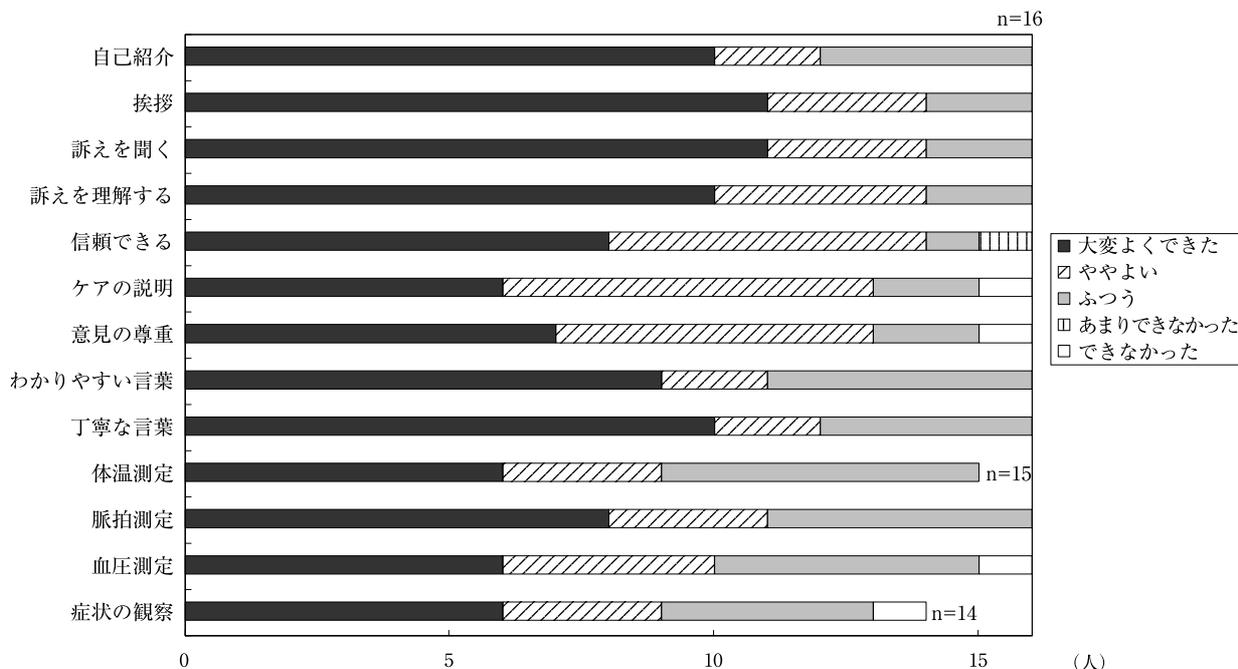


図1 受け持ち学生の技術に対する患者の評価

の意見を尊重する」が4.13, 「ケアの説明を十分する」が4.06であった。観察技術4項目のうち、得点が最も高かったのは、「脈拍測定」で4.19, 次いで、「体温測定」が4.00, 「血圧測定」が3.93, 「症状の観察」が3.88であった。

各患者が回答した段階の内訳は図1に示した。コミュニケーション技術では、「信頼できる」, 「ケアの説明を十分する」, 「ケアの方法について患者の意見を尊重する」の3項目における各1名を除き、すべて「ふつう」から「大変よくできた」の範囲であった。「信頼できる」で1名が「あまりできなかった」と回答し、「ケアの説明を十分する」, 「ケアの方法について患者の意見を尊重する」でそれぞれ1名が「できなかった」と回答した。観察技術では、「血圧測定」, 「症状の観察」の2項目における各1名を除き、すべて「ふつう」から「大変よくできた」の範囲であった。「血圧測定」, 「症状の観察」でそれぞれ1名が「できなかった」と回答した。「体温測定」では1名, 「症状の観察」では2名の患者が、受け持ち学生は該当する技術を実施していないと回答し、評価が得られなかった。

## 2. 患者の学生に対する期待

基本技術13項目の項目別期待得点を表2の項目別評価得点と並べて示した。コミュニケーション技術9項目のうち、得点が最も高かったのは、「挨拶」で4.31, 次い

で、「信頼できる」が4.13, 「わかりやすい言葉づかい」が4.00, 「訴えを聞く」および「訴えを理解する」および「ケアの方法について患者の意見を尊重する」が3.94, 「自己紹介」および「ケアの説明を十分する」が3.75, 「丁寧な言葉づかい」が3.63であった。観察技術4項目のうち、得点が最も高かったのは、「症状の観察」で3.64, 次いで、「脈拍測定」および「血圧測定」が3.56, 「体温測定」が3.44であった。

各患者が回答した段階の内訳は図2に示した。コミュニケーション技術では、「訴えを理解する」, 「信頼できる」の2項目における各1名を除き、すべて「ふつう」から「最も期待する」の範囲であった。「訴えを理解する」, 「信頼できる」でそれぞれ1名が「全く期待しない」と回答した。観察技術では、「症状の観察」で2名が分からないと回答したが、残りの項目では、すべて「ふつう」から「最も期待する」の範囲であった。

## 3. 項目別評価得点と項目別期待得点の比較

表2に示した基本技術13項目の項目別評価得点と項目別期待得点を比較すると、すべての項目において、項目別期待得点より項目別評価得点が高かった。

## 4. 実施した技術の評価とその技術に対する期待の度合いの比較

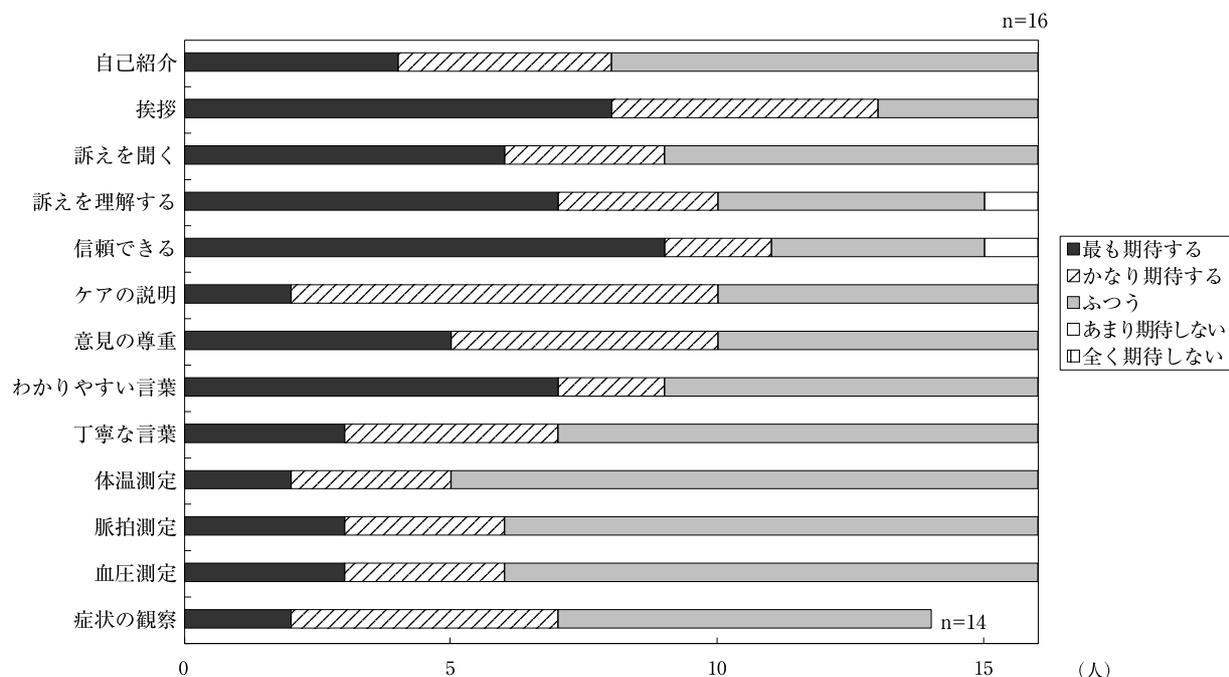


図2 看護学生の技術に対する患者の期待

基本技術13項目に対する患者個々の評価と期待の関連を図3に示した。「期待より高い評価」をした患者が多かった項目は、コミュニケーション技術では、「丁寧な言葉づかい」が9名、次いで、「訴えを聞く」と「訴えを理解する」と「ケアの説明を十分する」が7名、「自己紹介」が6名であった。観察技術では、「体温測定」と「脈拍測定」と「血圧測定」が8名であった。「期待と同程度の評価」をした患者が多かった項目は、コミュニケーション技術では、「信頼できる」が10名、次いで、「自己紹介」と「わかりやすい言葉づかい」が9名、「挨拶」と「訴えを聞く」と「訴えを理解する」と「ケアの方法について患者の意見を尊重する」が8名であった。観察技術では、「脈拍測定」が8名、「血圧測定」が7名であった。「期待より低い評価」をした患者は、「挨拶」、「ケアの説明を十分する」、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」、「症状の観察」で3名、「信頼できる」、「わかりやすい言葉づかい」で2名であった。

患者個々の評価と期待との関連を見ると、対象者全員が何らかの項目において「期待より高い評価」をしていた。そのうち8名は、全項目について「期待より高い評価」もしくは「期待と同程度の評価」をしていた。他の8名は、何項目かで「期待より低い評価」をしていた。その中で2名の患者は5項目以上について「期待より低い評価」をしていた。

## 考 察

### 1. 受け持ち学生が行った基本技術に対する患者の評価について

結果に示した表2から、基本技術の項目別評価得点は、すべての項目において3.88以上であり、良好な評価であるといえる。相対的に見ると、「挨拶」(4.56)、「訴えを聞く」(4.56)、「訴えを理解する」(4.50)などが得点が高い。これらの項目は、日常生活における人間関係の中で必要になるであろう項目であり、学生にとっては日常生活の延長線上にある技術であると考えられる。また、臨床実習の場においても、看護師とは異なり、一人の患者を受け持ち、じっくりと関わることができる学生の立場を考えても、これらの項目が患者から高い評価を得たことは理解できる。三好<sup>7)</sup>は、学生の存在が患者の情緒的な安定につながる側面があると考えられると述べているが、本研究の結果からも、学生が行った「訴えを聞く」、「訴えを理解する」という行為が、患者の精神面への支援につながっていたことが推察される。

一方、得点が低い項目は、「症状の観察」(3.88)、「血圧測定」(3.93)、「体温測定」(4.00)、「ケアの説明を十分する」(4.06)、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」(4.13)などである。これらは看護師としての専門的知識や技術を必要とする項目であり、学生にとっ

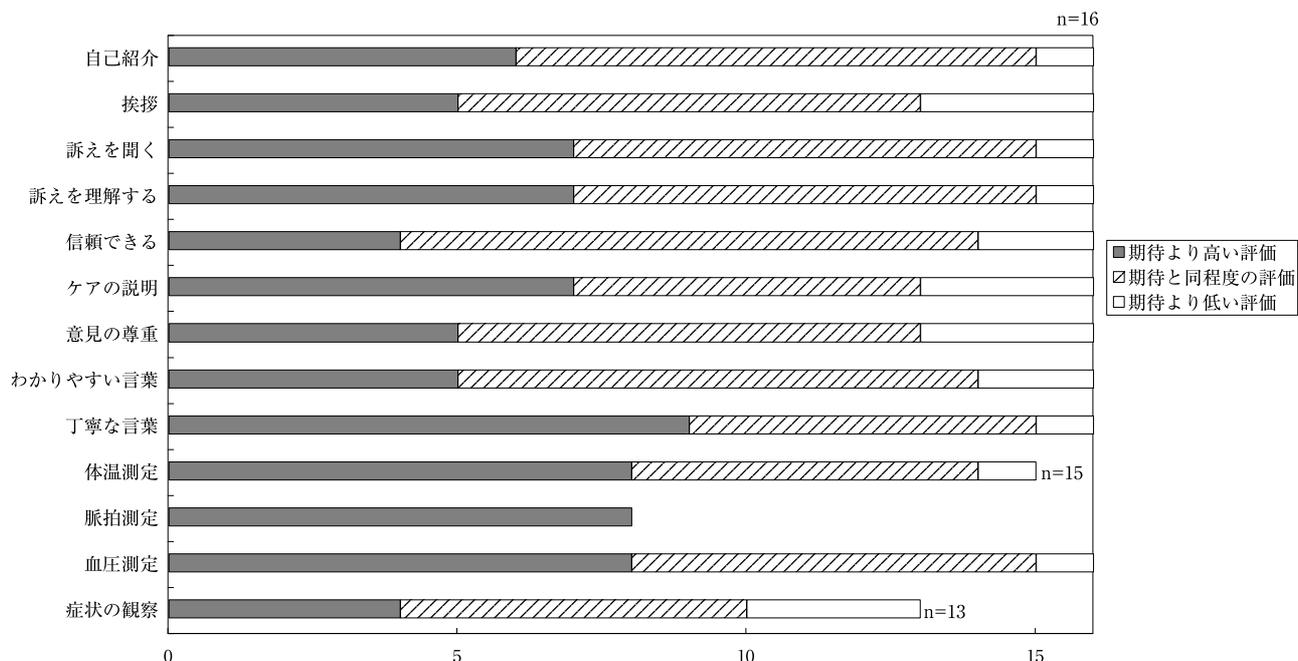


図3 実施した技術の評価とその技術に対する期待の度合

ては、臨床実習の場で新たに必要とされる技術であると考えられる。さらに、これらは、患者との関係を築いた上で初めて確実に実施することが可能となる項目である。そのうち、「症状の観察」、「血圧測定」、「体温測定」などは、学習によって知識が増し、繰り返しの練習によって技術が向上すれば改善できる技術と考えられる。しかし、「ケアの説明を十分する」、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」などは、学習や経験による成果が得られにくく、看護者としての姿勢に関連することである。山里他<sup>8)</sup>が、検査・処置の説明の際は患者の反応や理解度を確認し、ニーズを表出しやすいよう、ゆとりある態度で接していくことが必要であると述べているように、筆者らもこれらを重要な要素と考えている。今後、このような態度が学生に定着するような教育・指導を検討していきたい。

結果に示した図1から、受け持ち学生が行った基本技術に対する患者の評価は、ほとんどが「ふつう」以上であり、おおむね肯定的なものであるといえる。学生がこれまでの生活の中で身につけてきたことに加え、授業や基礎看護学実習などをはじめとする教育の成果が現れていると考えられる。しかし、「信頼できる」の項目で1名が「あまりできなかった」と評価し、「ケアの説明を十分する」、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」、「血圧測定」、「症状の観察」の項目で各1名が「できなかった」と評価している。これらの項目は、看護者にとって最も基本的であり、重要な項目であるため、少数ではあるものの否定的な評価があったことは軽視できない。今回の調査では、患者が受け持ち学生を評価した根拠については把握できていないが、今後、否定的な評価になる原因について追究し、さらに教育内容や方法を検討し、改善していく必要があると考える。

## 2. 看護学生の基本技術に対する患者の期待の割合について

結果に示した表1から、基本技術の項目別期待得点は、すべての項目において3.44以上であり、期待が高いといえる。相対的に見ると、「挨拶」(4.31)、「信頼できる」(4.13)、「わかりやすい言葉づかい」(4.00)、「訴えを聞く」(3.94)、「訴えを理解する」(3.94)、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」(3.94)などの得点が高く、「体温測定」(3.44)、「脈拍測定」(3.56)、「血圧測定」(3.56)、「丁寧な言葉づかい」(3.63)、「症状の観察」(3.64)などの得点が低い。このことから、患者は、

看護学生に観察技術よりコミュニケーション技術を期待していることが分かる。その中でも特に「挨拶」、「信頼できる」という日常生活でも必要となる範囲のことや、人間関係の基本となることに対しては、期待が高いといえる。これらの点は、専門的な知識や技術もさることながら、日常生活における基本的行動がスムーズにとれるよう指導する必要性があることを示唆している。

結果に示した図2から、看護学生のコミュニケーション技術および観察技術に対する患者の期待はほとんどが「ふつう」以上であり、これらの技術に対する患者の要求は高いといえる。「訴えを理解する」、「信頼できる」で各1名が「全く期待しない」と答えているが、この患者は、学生にそのような医療従事者としての役割を求めていると考えられる。しかし、学生としての範囲での信頼について、患者に理解を求めた上で、看護学生と患者の好ましい人間関係を作れるよう関わっていきたい。

## 3. 項目別評価得点と項目別期待得点の比較から

コミュニケーション技術および観察技術の全項目について、項目別評価得点と項目別期待得点を比較した。表1から分かるように、すべての項目において、項目別評価得点が項目別期待得点より高い。この結果から、全体的に見ると患者は受け持ち学生が実施した技術を、学生に期待する技術よりよくできたと評価しており、患者は受け持ち学生が実施した技術におおむね満足していたといえる。

## 4. 実施した技術の評価とその技術に対する期待の割合の比較から

個々の患者について各項目の評価と期待との関連を見ると、図3に示したように、「脈拍測定」を除く各項目において、数名の患者は受け持ち学生が実施した技術を看護学生に期待する段階より下であると評価していた。このことから、これらの患者は受け持ち学生が実施したコミュニケーション技術あるいは観察技術に対して期待よりも低いと捉えていたといえる。

評価と期待との比較において、期待よりも低いと評価された学生が多かった項目は、「挨拶」、「ケアの説明を十分する」、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」などであり、これらの内容は、考察1.2.でも述べたように、日常生活においても必要となる基本的な行為であったり、看護者としての姿勢であったりする。特に、「挨拶」は項目別評価得点で見ると最も高い評価をされ

ていたが、患者個々の評価と期待との関連で見ると3名の患者が「期待より低い評価」をしていた。このことから、患者は、学生に対して「挨拶」はきちんとできて当然であると考えていると推察できる。これらの基本的な事柄については、患者のみならず我々からしても期待は高い。しかし、患者の期待に添っていないという評価結果が一部の患者にでもあったことは重要な課題であり、今後の教育・指導において重点的に関わっていくことが必要といえる。

一方、個々の学生について、各項目の評価と期待との関連をみると、5項目以上について期待よりも低い評価をされた学生は、それぞれの技術について学生として劣るとは評価されていなかった。このような結果となった要因として、化学療法中など患者の状態が悪く、学生を受け入れることができる状態ではなかったために、学生が行った基本技術を否定的に捉える結果となったことが推測される。受け持ち患者の決定に際しては、患者の状態を考慮した上で患者の意向も確認しているが、今後、さらに細心の注意を払う必要がある。

以上のことから、臨地実習においては、学生の能力と患者の状況の両者を十分把握した上で、両者に対して指導および援助を行っていくことが重要といえる。

## 結 論

慢性期看護実習で学生が5週間継続して受け持った患者16名を対象に、学生が実施したコミュニケーション技術9項目および観察技術4項目に対する患者の評価とそれらに対する患者の期待を調査した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生が実施した技術に対する患者の評価はおおむね良好であり、評価が高かった項目は、「挨拶」、「訴えを聞く」、「訴えを理解する」であり、低かった項目は、「症状の観察」、「血圧測定」、「体温測定」、「ケアの説明を十分する」、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」であった。
2. 学生のコミュニケーション技術および観察技術に対する患者の期待は高かった。中でも期待が高い項目は、「挨拶」、「信頼できる」、「わかりやすい言葉づかい」、「訴えを聞く」、「訴えを理解する」、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」であり、低い項目は、「体温測定」、「脈拍測定」、「血圧測定」、「丁寧な言葉づかい」、「症状の観察」であった。

3. 項目別評価得点と項目別期待得点を比較すると、すべての項目において、評価得点が期待得点より高かった。

4. 学生が実施したコミュニケーション技術および観察技術に対する評価とそれらの技術に対する期待の度合の関連では、期待より高い評価が多かった項目は、「丁寧な言葉づかい」、「訴えを聞く」、「訴えを理解する」、「ケアの説明を十分する」、「体温測定」、「脈拍測定」、「血圧測定」であった。期待と同程度の評価が多かった項目は、「信頼できる」、「自己紹介」、「わかりやすい言葉づかい」、「脈拍測定」、「血圧測定」であった。期待より低い評価がなされた項目は、「挨拶」、「ケアの説明を十分する」、「ケアの方法について患者の意見を尊重する」、「症状の観察」であった。

本研究は、平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）の助成を受けて実施した研究の一部である。

また、この論文の一部は、日本看護学教育学会第10回学術集会において口頭発表した。

## 文 献

- 1) 菊池令子：入院中の看護の満足感と看護婦への期待－退院患者へのアンケートから、－日本看護協会調査研究報告，29，8-49，1989.
- 2) 山里綾乃，糸数枝美子，宇江城利加 他：看護ケアに対する患者の満足度調査，沖縄県立中部病院雑誌，26(1)，34-38，2000.
- 3) 岩沢純子，鈴木妙，原嶋朝子 他：看護ケアに対する入院患者の満足度－1995年・1997年調査結果－，患者満足，4(3)，151-157，2000.
- 4) 三好さち子：成人患者の看護学生による受け持ち前後の認識と援助期待，日本看護学教育学会誌，7(2)，89，1997.
- 5) 長谷川えり子，村井静子，村中哲夫：看護行為に影響を及ぼす付き添い・学生相互の意識－小児看護実習から－，日本看護学会第22回集録看護教育，216-218，1991.
- 6) 国立大学病院長会議常置委員会：国立大学病院患者さまアンケート，フォーラム国立大学病院，2，4，2002.
- 7) 前掲4)
- 8) 前掲2)

*Patient evaluations of and expectations for communication  
and observation skills in student nurses  
-a survey of chronically-ill patients under student nursing care-*

Yoshie Sato<sup>1)</sup>, Toshiko Ikeda<sup>1)</sup>, Kumi Watanabe<sup>1)</sup>, Kanae Momino<sup>1)</sup>, and Naomi Kanao<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Faculty of Health Science, Okayama University Medical School, Okayama, Japan

<sup>2)</sup>National Cancer Center, Hospital East, Chiba, Japan

**Abstract** As part of the clinical nursing experience, nursing students were assigned to take care of patients requiring treatment for chronic health conditions for five consecutive weeks. The study was conducted to ascertain how 19 consenting patients assessed the attitudes and communication and observation skills of nursing students. Patients were also asked about their expectations of the students. Results showed that patients expected nursing students to demonstrate a high level of skills; the communication and observation skills of the nursing students were generally assessed favorably. However, a few patients gave negative assessments of the students' attitudes and skills and stated that they did not expect anything from them. Our results suggest that it is necessary to further investigate the attitudes of nursing students and the conditions for their clinical assignments.

*Key words* : nursing students, communication skill, observation skill, evaluation